
咲き乱れんノ

神山紗樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

咲き乱れんノ

【Nコード】

N6480V

【作者名】

神山紗樹

【あらすじ】

ギャル軍団をしきるギャルの麻衣華と平凡な人間の菜々。

最初は、麻衣華がいやだった菜々も次第に打ち解け始めます。

それから麻衣華の好きな人を知り ？

友情& amp・恋愛です。

(前書き)

短編を書くつもりでいたので無理やりまとめた感が残ってしまった
かもしれない。
でもがんばって書きます。

不愉快……実に不愉快である。

友人の美幸から絶対来てよねと念まで押されて行かざる負えなくなつたこの女子会。

しかし、出るもの出るもの全部カレシの自慢やクラスで少々浮いてるやつらの陰口って言うか嫉妬話のオンパレードに呆気にとられてる。

女子会って言えばよく雑誌に載ってるカラオケやらスイーツバイキングやらを想像していた私であったが、まさかクラスのギャルらを取り仕切るギャル番長こと中山麻衣華ナカヤママイカとその他3人のギャル軍団と美幸と麻衣華のピンクで目がチカチカする自宅の一室でやることになるとは想像していなかった。

「ま〜い〜か〜ちよつと、菓子たんないんだけど」

隣のクラスのギャル番長がカラの菓子の袋をぶらぶらさせながら言うと、麻衣華がなにやら不機嫌な顔でその子を睨みつけた。

「ちよ、ちよつとそう言う目で見られたらこっち、気分悪いんすけど。ごめんうち帰るわ」

「じゃあうちらもお暇いとやすみするね」

どうやら隣のクラスのギャルにつられて私と同様の断れなくて来てしまった平凡な人間も帰ってしまった。

そして気がつくところには私と美幸と麻衣華の3人になっていた。実にただならないほどの重い空気がそこに舞っているのが身にしみてよくわかる。さすがの私もこの空気を切り出すことが出来ずにいた。しかし横をチラリと見ればチョコを口にこれでもかかって位に詰め込んでいる麻衣華を見てさすがに緊張の糸がほどけた。

「あんたちよつと詰めすぎだよ〜」

そういうとギャハッと笑い

「いや、うますぎてやめらんないよ」

ゲラゲラ笑う姿に私も面白くなった。

「なんでさっきあの子たちを追いだしたの？」

私が尋ねると顔色ひとつ変えずに

「なんかうち悪口言う奴と絡みたくないんだよね。あとま〜い〜か
〜って言ったからま〜い〜かって聞こえてム力つくんだよだから追
い出した」

良い人なのか？ と思ったのだが意外に自分でそれを隠そうとし
ているようにも思えた。

でもなんだか悪い人ではないかもしれない。

「じゃあー恋バナしよ」

平然と切り出した麻衣華の提案に逆らう事もなく「おー」と賛成
する。

「美幸は山田とラブラブなんですよ。裏山〜」

そうだった。美幸は山田という実に平凡な人間の彼氏がいてラブ
カップルであるが、夫婦みたいと羨ましい面もある。

「で、菜々は優太のことが好きでしょ」

「はっ!？」

何故か私の好きな人を当てる麻衣華。凄すぎる、通しでもできる
のか？ と疑ってみる。

「えーっ、私ずつと菜々といっしょにいたのに気付かなかった」

そう美幸が言つと腕を組んでどや顔をする麻衣華。

「どうせあんたは、隣んクラスのモテ男君でしょ。たしか大屋雄幸
だっけ？」

そう私が言つたが動じない。

「じゃあ誰なの？ どうせだしいつちやいなよ」

言えるように良いテンションにすると顔がまるで部屋と同化する
ようなピンク色に。

「山本和人」

あまりにも小さい蚊の鳴く声のような声にまたびつくら仰天。

「和人ってあの？」

美幸が疑うのもよく分かる。だって山本和人っていったらクラス
の地味軍団の一員だし、麻衣華としゃべっている所なんてミスマッ
チで想像もつかないっていうか少々鳥肌が立ってしまいうくらいだ。

「しっかどこがいいの？ あいつの」

「顔は良いし、それに縁の下の力持ちつーか雑用とかよくやってる
っしょ。そーゆーのうちは好きだなって」

麻衣華は、口は悪く言っただけど照れテレで本当に女の子って感じ
がする。それに和人なんて私も多分みんなあんまり見てないと思う
のにそれを分かってあげてる麻衣華はすごいかもって思った。

「菜々は、まあ頑張りなよ。優太モテるし早くとらないと持ってか
れちゃっわよ」

「それはお互い様でしょ」

そうやって笑った時間が胸に残る。

あれから1週間が経った。

「昨日のなんかのドラマでさ、イケメン俳優出てたことない？」

「あゝごめん、それ見てないな」

麻衣華と仲が良くなって、毎日3人であることが多くなった。

それにもう1つ変わったこと。

「おはよゝ、最近いつもより顔色よくなったことない？ 恋でもし
てんの」

私がそいつに言う顔が真っ赤になって面白い。

「そろそろ告っちゃえば？」

そう麻衣華の耳元で囁くと、一瞬赤くなった耳が引いていくのが
分かったので、もうからかうのをやめようと思った時。麻衣華がい
きなり立ち上がった。

「うち、和人が好きっ」

呆然としている私たち二人を横目にクラス中に聞こえる位の声で言った。

「俺も好き、付き合ってください！」

「へっ？ うん」

その返事が余りにも小さいものだったけれども和人の耳には届いたみたい。

「うちらさ、愛のキューピットになったね」

「それを言うならただのおせっかい婆でしょ」

2人はポーっとして立つたまんまだった。

だけど、麻衣華と和人には見えないけど桜の花が咲き乱れる気がして少し羨ましくなった。

「うちもこの波に乗って告白しちやおっかな」

「えっ？ ホントに!？」

美幸がそう言うと思って面白くて

「じょーだんです」

ってバカにしたように言った。

だけど、きっと私の何かが変わった気がした。

「でも麻衣華って本当に変わってるね」

「うん？ なんか言った？」

麻衣華は、私の言った言葉に振り向いた。

「うちら3人にも桜が咲き乱れてんのかもね」

(後書き)

麻衣華はうちは一応モデルとなる人がいたのですが、こんな人だったらいいな」と想像して書きました。

友情と恋愛という事で短編で書きたいって思っていました。なかなかよくできませんでした。

改善していいことと思うので、よかつたら評価&感想を書いてください。書いてもらえるとうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6480v/>

咲き乱れんノ

2011年8月12日03時21分発行